

# くじらと温泉

作者・・・久下圭祐（篠山市）  
参考・・・ふるさと西紀の民話集  
発行・・・（財）兵庫丹波の森協会  
「丹波のむかしばなし」  
第七集より

昔から草山は、<sup>みたけ</sup>三嶽から流れ出る清水に恵まれ、夏には蛍が飛び鮎や鯉が泳ぐ

緑豊かな所です。この草山の<sup>おちかた</sup>遠方に、<sup>しおいずみいけ</sup>潮泉池と呼ばれる池があり、その池には面白い話が伝わっています。

今の日本が<sup>おおやしま</sup>大八州と言われていた昔 昔の話です。

北の日本海に太郎という大きな雄のくじらが住んでいました。又、南の瀬戸内海には花子という心の優しい雌のくじらが住んでいました。太郎は、南の海の花子に一目会いたいと思い始めました。「花子に会いたいな。」

「でも、日本の陸地は広く山は高いし、いくら背伸びをしても飛び跳ねても南の海は見えへん。困ったなあ。どうしよう。」「何か良い方法はないかなあ。潜ってみてはどうだろう。えいっ、日本の下をもぐって行ってみよう。」

心を決めた太郎は、思い切り大きく息を吸って、深い深い海の底をどんどん潜って行きました。しかし、いくら泳いでも暗い陸の下が続くばかりです。息も苦しくなった太郎は、

「もう そろそろこの辺りは南の海に近いだろう。一度様子を見てみよう。」と、土を押し上げ目を開けてみて大変驚きました。「これは 何や。山ばかりやないか。海が見えるどころか、山また山の丹波篠山の遠方やないか。」がっかりした太郎は、あわてて又、土の中にもぐり、南の海を目指して泳いで行きました。

そして、力を振り絞った太郎は、とうとう花子に出逢う事ができたそうです。

くじらの太郎が覗いた遠方の穴は、海まで続くトンネルとなりました。そして、

<sup>しおいずみいけ</sup>潮泉池からだけでなく<sup>おちかた</sup>遠方の井戸からも塩辛い水が出ました。

こんな昔話を、おじいさんやおばあさんに聞かされていたと遠方の仙吉さんは、「草山の遠方にも温泉が出るかもしれないぞ。」と、考え温泉を掘る事にしました。

「そんなもん あかん あかん。やめとけ やめとけ。」と、村の人達に言われましたが、

「いや、出る筈や。必ず出る。」心を決めた仙吉さんは、自分のお金を全部出して掘り続けました。ある日の夕方 ぶくぶくとお湯が湧き出て来ました。仙吉さんは、「何や これは。塩辛いぞ。」

「温泉だ。温泉が出たぞ。やった。やった。」

仙吉さんは、ざぶんと飛び込み、涙を流して喜びました。

其の事が村の人達に伝わり 広がりました。

「ちょっと塩辛いけど、疲れがとれて気持ちがよいなあ。」「病気にも きくそうな。」と、遠くからも 多くの人達が喜んで入りに来ました。

多くの人々に喜ばれる温泉場を作った仙吉さんは、今も村の人達から慕われているそうです。